

安土八幡市が誕生する

歴史と文化と自然が溢れるまち

湖東平野

に位置する安

土・近江八幡は

弥生時代から人々が住み

稲作が伝わり、大中の湖周

辺では水田や集落の跡が見つ

かっている。大和朝廷の統一が進

み、律令が制定され土地区画が

行われ、「郷」が生まれた。平安

と各地の貴族や寺院が土地

になり、これが荘園と言われ、

土地争いが起

こり武士の時代が始まる。佐々木定綱は数々の

戦功を立て、近江国の守護に任じられ、その後、

湖東地域は京都に宿所を置いた佐々木六角氏

に400年間支配され、「観音寺城」を囲むよう

に砦が築かれ、家臣に守らせていた。

「近江を制するものは、天下を制す」と言わ

れ、戦国時代には京への上洛を夢見た「織田信

長」が安土に城を築いた。そして、戦乱の時代を

通り抜けた多くの武将たちのドラマが近江で繰

り広げられた。本能寺の変で信長が非業の最期

を遂げた後、日本で最初の高層建築といわれ、

豪華絢爛天下統一のシンボルであった安土城は、

わずか3年で儂く落城した。

その3年後の天正13年(1585)、18歳にし

て近江43万石の領主に任じられた「豊臣秀次」

は、安土から八幡に商工業者や住民を移し、風



織田信長像

土山下町掟書」は、青年武将秀次が新しい形で近江八幡に受け継ぎ、八幡山城が築かれ城下町が生まれた。自由商業都市として発展を目指し、楽市楽座を取り入れ「八幡山下町中掟書」をひいた。また、琵琶湖につながる運河「八幡堀」を設け町の活性化を図り、わずか5年の治政で商いのまちとしての繁栄の基盤を築いた。

青年武将として叔父である豊臣秀吉につかえ後継者として関白を受け継ぎながら、太閤秀吉に高野山で秀次は28歳の若さで自害させられた。一族すべてを京都三条河原で処刑されたと言う悲運の青年大名「豊臣秀次」のドラマがあり、安土・近江八幡の民が我々の祖先である。民が築き上げた町の底力は主君秀次公が抹殺された後、自らまちを治め商人が全国を駆け巡り、江戸の地に大店と言われるほど大成する。

再生の時代がやってきた

安心して安全な暮らしができる町であり、簡単に手に入れることのない歴史や文化の宝庫である安土・近江八幡が新しいまちづくりをする。昭和の時代には高度経済成長の波に飲み込まれながら、市町民が築き上げた町がこの平成の時代に合併されようとしている。今後、何十年何百年か後に語り継がれる時、誇りの持つ潤いのある発展した町として引

き渡せるように、進めていかなければならない。社会がひずみ銀行が破たんする時代となり、これからは市町村が破たんする時代が来るのではない。その解決策のひとつが合併であるのかもしれない。わたしたち市民は自ら町を守り、町を育て、町を繁栄させて次世代に渡していかなければならない義務がある。

人に優しく慈しみながら輝くまちづくりをしていきたい。今回の安土・近江八幡の合併は、日本全国の中でも歴史と文化と自然や琵琶湖、西の湖、山や川、里がある、すばらしいまちの合併である。八幡山と長命寺山の入江は、津田の細江」と言われ、津田と呼び名される地は織田信長の祖先とつながりを持ち、信長は織田氏親実の十四世の子孫とされている。図らずも平成の時代に祖先の縁なのか、安土八幡市が誕生することを喜びたい。



豊臣秀次公像